國學院大學学術情報リポジトリ

「召し寄す」の通常語形

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 寧真, Wu, Ningchen メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000472

「召し寄す」の通常語形

呉　寧真

一、はじめに

源氏物語には、以下のような例が見られる。

1　（薫ハ）あやしと思しければ、……、随身召し寄す。
〈浮舟　六、一七三〉

2　宮（＝匂宮）は、……、よしある御くだもの召し寄せ、
〈宿木　五、四一二〉

「召し寄す」の動作客体について、1はヒト（随身）、2はモノ（御くだもの）である。ではこの「召し寄す」の通常語形[1]は何だろうか。

「召し寄す」の通常語形を明らかにするため、まず単独の「召す」の通常語形を確認する。敬語独立動詞「召す」は複数の動詞の主体敬語の形である。現行の古語辞典を確認したところ、動作客体がヒトの場合、「呼ぶ」「招く」とする辞書と「呼び寄す」とする辞書がある。動作客体がモノの場合、ほとんどの辞書は「取り寄す」とするが、「取る」とする辞書もある[2]。なぜこのような違いがあるのだろうか。

また、「呼び寄す」「取り寄す」を通常語形とする辞書が多い。しかし、12の「召す」に置き換えると「呼び寄せ寄す」「取り寄せ寄す」になるが、このような形は存在しない。よって、「呼び寄す」「取り寄す」を「召す」の通常語形の候補からひとまず外して考える。

では、本稿はヒトを呼び寄せる場合とモノを取り寄せる場合に着目し、「召し寄す」の通常語形は何か、複合動詞[3]を手掛かりとして明らかにする。

二、調査方法

本稿は「呼ぶ」「招く」「取る」「召す」の複合動詞を調査対象にする。「召す」は主体敬語であり、それと対応させるため、「呼ぶ」「招く」「取る」の複合動詞も主体敬語の形を調査し、「呼ぶ」「招く」「取る」「召す」の複合動詞の主体敬語の形はどのようなものがあるのかを確認する。

本稿の調査資料には源氏物語を用いた。調査には「日本語歴史コーパス」（国立国語研究所（二〇一八））を利用し[4]、例文は『新編日本古典文学全集』から引用し、表記は一部改めた。引用文中の〔　〕は話し手と聞き手を、（　）は補足説明を、〈　〉は出典の巻名、新編全集の巻数、頁数を示す。

三、「呼ぶ」「招く」

ヒトを呼び寄せる場合の「召し寄す」の通常語形は二種類の可能性が考えられる。

まず、「招く」から検討する。「招く」は一見「呼ぶ」と同じ、ヒトを来させる動作のように見えるが、「呼ぶ」の「声をかけたり、知らせを出したりして来させる」（『日本国語大辞典　第二版』、以下日国）の意味と異なり、「手や袖を動かすなど合図をして、近くに来るようにうながす」（日国）の意味である。つまり、目に見える動きがなければ「招く」を使うことができない。

「招く」は例が少なく、源氏物語に八例しかない[5]。そのうちには、3のように、扇や袖と共起するか、「手を差し出づ」など、明らかな動作描写のある例がある。残りは4のように、明らかな動作描写はないが、動作客体（猫）は動作主体（柏木）の視野のなかにいる例である。

3　よろしき女車のいたう乗りこぼれたるより、扇をさし

出でて人を招き寄せて、〔源典侍〕「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。

〈葵　二、二九〉

4　（柏木ハ）わりなき心地の慰めに、猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくてらうたげにうちなくもなつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしきや。

〈若菜上　四、一四二〉

3は源典侍が源氏の供人を招く場面であり、扇を差し出して招くと明記している。4は柏木が女三宮の猫を招き、抱きしめる場面であり、明らかな動作描写はないが、声だけで呼ぶとは考えにくい。また、この場面は、猫が女三宮の御簾の綱を引いたことによって、柏木が女三宮を見た場面であるため、猫は柏木の目の前にいると分かる。「招く」のすべての例の動作客体は、必ず動作主体の視野のなかにある。

それに対し、「召し―」は八十八例中、扇や袖と共起する例がなく、視野のなかにいないヒトを呼んだ例も見られる。

5　（八の宮ニ）参りとぶらひきこえ、心寄せたてまつる人もなし、つれづれなるままに、雅楽寮の物の師どもなどやうのすぐれたるを召し寄せつつ、はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、

〈橋姫　五、一二五〉

5は、八の宮は普段することもなく、楽師たちなどを呼んで遊んだと描写する場面である。楽師たちが常に視野のなかにいるとは考えにくい。

また、「招く」には和歌の例が多く、稲穂などの植物が動作主体になる例や、月などの無情物が動作客体になる擬人化した例があり、「召す」「呼ぶ」にはこのような例が見られない。

以上のように、「招く」は視野のなかにある動作客体を動作によって来させることで、「召す」「呼ぶ」と意味が異なる。よって「招き寄す」も「召し寄す」の通常語形ではない[6]。

次に、「呼ぶ」を検討する。「呼ぶ」は「召す」と同じ、声や知らせを出してヒトを来させる動作である。まず、単独の動詞を使う場合を確認する。

6　（源氏ハ）苦しく思しわびて、紀伊守を召したり。

〈帚木　一、一〇五〉

7　君（＝薫）もやをら出でて、御衣など着たまひてぞ、例召し出づる障子口に尼君呼びて、ありさまなど問ひたまふ。　〈宿木　五、四九四〉

6は「召す」の例、7は「呼ぶ」の例で、ともに人を来させる意味である。

「呼ぶ」の主な使い方は三種類あり、一つ目は「声をあげて、他人の名前などを口にする」（日国）、すなわち「来させる」まで含まない動作である（これを①とする）。8のように、「召す」にも対応する意味がある。

8　（柏木ガ）あやしく聞きも知らぬことどもをぞ聞こゆるや。（女三宮ガ）あさましくむくつけくなりて、人召せど、近くもさぶらはねば、聞きつけて参るもなし。　〈若菜下　四、二二四〉

8は柏木の侵入に気付いた女三宮が女房を呼んだが、近くに誰も控えていないため、誰も来ない場面である。近くへ来させることができない「召す」は、「呼ぶ①」と対応する。二つ目は7のように「声をかけたり、知らせを出したりして来させる」である（これを②とする）。6のように「召す」にも対応する意味がある。

三つ目は「名を…という。その者の名を…だとする。称する」（日国）の意味である（これを③とする）。この使い方は源氏物語には見られないが、中世には以下のような例がある。[7]

9　判官五位尉になられし時、五位になして大夫黒とよばれし馬なり。　〈平家物語、嗣信最期　十一、三五五〉

9は馬について説明している。その馬の名を大夫黒と称した例である。このように、声や知らせなどを出さない「呼ぶ」に、「召す」は対応しない。従って、本稿は③の「呼ぶ」を取り扱わず、①②だけを取り扱う。

次に、複合動詞を使う場合を確認する。「召す」も「呼ぶ」も複合動詞の後項になれず、前項になる場合、「召し―」が八十八例、「呼び―たまふ」が八例見られ、共通する後項になる動詞は「入る」「出づ」「取る」「寄す」の四語である。

10　〔今上帝〕「……」とて、碁盤召し出でて、（薫ヲ）御碁の敵に召し寄す。　〈宿木　五、三七八〉

11　尼君、入りたまへる間に、客人（＝中将）、雨のけしきを見わづらひて、少将といひし人の声を聞き知りて、呼び寄せたまへり。　〈手習　六、三〇七〉

10は帝が囲碁の相手として、薫を呼んで来させた場面である。11は中将が少将の尼の声を聞いたので、呼んで来させた場面である。「召し寄す」の通常語形は「呼び寄す」と考えて問題ない。また、「召し―」と「呼び―たまふ」の違いについて、「召し―」は10のように動作主体が最上位者の帝の例があるのに対し、「呼び―たまふ」に動作主体が帝の例がないことから、「召し―」の方の敬意がより高いと考えられる。

以上のように、ヒトを呼ぶ場合、「召す」の通常語形は「呼ぶ①②」であり（「称する」の意味③は除く）、「召し寄す」の通常語形は「呼び寄す」であると考えられる。

四、「召す」「取る」「取り寄す」

モノを取り寄せる場合の「召し寄す」の通常語形は、ヒトを呼ぶ場合の「呼ぶ」と同じように、「取る」を通常語形だと考えられるのだろうか。

「取る」の基本的な意味は「手に持つ。つかむ」（日国）であり、すなわち、「動作主体が自ら具体的なものを手にする」動作である。しかし、「召す」は動作主体以外の人に取ってもらう例しか見られず、「取る」の意味と異なる。

従って、「召す」の通常語形は、「取る」ではない。「召し―」の通常語形も、「取り―」ではない。では他には何があるのだろうか。以下はまず「召す」の複合動詞を確認してから、「取る」の複合動詞を「人が介在するかどうか」の観点から分析する。

㈠　「召す」の複合動詞

「召す」が複合動詞の前項になる場合十三例見られ、後項になる動詞は「集む」「出づ」「寄す」の三種類である。

「召す」のすべての例に人が介在する。以下例をあげる。

12　（源氏ハ）上（＝紫の上）にも語らひ聞こえたまへるなるべし、御匣殿などにも、設けの物召し集めて、色あひ、しざまなどことなるをと選らせたまへれば、　〈玉鬘　三、一二三〉

13　〔今上帝〕「……」とて、碁盤召し出でて、（薫ヲ）御碁の敵に召し寄す。　〈宿木　五、三七八〉

14　〔源氏→滝口〕「なほ持て来や。所に従ひてこそ」とて、（紙燭ヲ）召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。　〈夕顔　一、一六七〉

12は源氏が服装を調達し、紫の上に選ばせる場面であり、実際に取り集めるのは御匣殿にいる女房である。13は帝が薫を呼び出し、囲碁をする場面であり、碁盤を取り出す人は明記されていないが、帝が自分で取り出すとは考えにくい。14は源氏が紙燭を近くまで取って来いと発言する場面であり、紙燭を持つのは滝口の男である。

以上のように、「召す」の複合動詞は人が介在する。

㈡「取る」の複合動詞

「取る」が複合動詞の前項になる場合は三十五例見られ、後項になる動詞は十六種類ある（集む、敢ふ、出づ、置く、返す、隠す、籠む、認む、使ふ、繕ふ、続く、具す、直す、成す、寄す、分く）。

まず、「取り―」には前項の機能が希薄になり、接頭辞的な用法や副詞的な用法があると指摘されている（阿部、二〇一三）。「召し―」は具体的なモノしか取り寄せず、それと対応するため、本稿は以下のように、具体的なモノを取る例だけ取り扱う。

15　（源氏ハ）書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば、取う出たまひて、かたみに御覧ず。　〈梅枝　三、四一九〉

16　今の世の人のすめる経うち誦み、行ひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、（末摘花ハ）数珠など取り寄せたまはず。　〈蓬生　二、三三二〉

次に、人が介在するかどうかについて検討する。「取る」の複合動詞のなかには、「取り寄す」だけは人が介在すると想定でき、「召し寄す」と対応するように見える。しかし、それは後項「寄す」の意味であり、他の「取り―」の例は人が介在しない。「取り―」は「召し―」と対応しない。以下は人が介在しないと想定できる例である。

17　（中将ガ）心あてに、「それか、かれか」など問ふ中に、

言ひあつるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふも、（源氏ハ）をかしと思せど、言少なにて、とかく紛らはしつつ（手紙ヲ）取り隠したまひつ。

〈帚木　一、五六〉

18　（源氏ノ）取り使ひたまへる調度どもかりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁、双六の盤、調度、弾棊の具など、田舎わざにしなして、念誦の具、行ひ勤めたまひけりと見えたり。〈須磨　二、二一三〉

17は中将が源氏の手紙を見て、書き手を当てようとして、源氏が手紙を取って隠した場面であり、わざわざ誰かを呼んで隠させるとは考えにくい。18は源氏の普段手に取って使う生活用品について述べるため、人が介在しないと考えられる。

以上のように、「取り―」に人が介在するのは「取り寄す」の例のみであり、他の例は介在しない。では、それ以外に、「取る」に人が介在する場合はどのような形があるのだろうか。

「取り―たまふ」は以下のように、使役の助動詞「す・さす」を用いる例がある。

19　宮（＝匂宮）も、あながちに隠すべきにはあらねど、さしぐみはなほいとほしきを、すこしの用意はあれかしとかたはらいたけれど、今はかひなければ、女房して御文取り入れさせたまふ。

〈宿木　五、四一〇〉

20　（源氏ハ）かのわが御二種のは、今ぞ取り出させたまふ。右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる、汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉掘りてまゐれり。宰相中将（＝夕霧）取りて伝へまゐらせたまふ。

〈梅枝　三、四〇八〉

19は匂宮が六の君の手紙を受け取る場面であり、「取り入る」のは女房だと記されている。20は源氏が香を取り寄せる場面であり、「取り出づ」のは惟光の子と夕霧だと記されているため、人が介在していることが分かる。

また、人が介在する「取り寄す」も、以下の例のように、使役の助動詞を用いることがある。

21　この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起き騒ぎ、上（＝雲居雁）も御殿油近く取り寄せさせたまひて、耳はさみしてそそくりつくろひて、抱きてゐたまへり。

〈横笛　四、三六〇〉

21は夜中に若君が泣き出すため、雲居雁が起こされて、灯を取り寄せて若君を抱き上げる場面である。雲居雁は最高敬語の「させたまふ」に待遇されると考えにくいため、この「さす」は使役だと考えられる。

従って、「召し―」は「取り―」と対応しないが、人が必ず介在することから、「取り―（さ）す」とは完全に対応する。つまり、この形こそ「召し―」の通常語形だと考えられ、「召し寄す」の通常語形は「取り寄せさす」と考えられる。

五、「召し寄す」の通常語形

三、四節で検討した結果、「召し寄す」の通常語形について、ヒトを呼ぶ場合は「呼び寄す」であり、モノを取り寄せる場合は「取り寄せさす」である。そこで疑問に思うのは、「呼ぶ」や「召す」に「す・さす」は後接するのだろうか、後接する場合、どのような体系になるのだろうかということである。

まず、「呼び―」に「す・さす」が後接する例が三例、そのうち二例は「呼び出づ」、一例は「呼び出だす」の例である。

22　（源氏ガ）うち臥したまへるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。　〈若紫　一、二一〇〉

22は源氏が休憩しているところ、僧都の弟子が使者として訪れ、惟光を呼び出す場面である。惟光が源氏の近くに控えているため、直接声をかけることはできず、取次の者を頼んで呼び出したと考えられる。「呼び出づ」「呼び出だす」の例はこのように、視野のなかにいない人を呼び出すため、使役の助動詞を用いることで、人が介在することが明白になる。

次に、「召し―（さ）す」は地の文に二例あり、「召し入る」と「召しさぶらふ」の例である。

23　（大君ガ）いと苦しげにしたまへば、（薫ハ）修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さまざまに験あるかぎりして、加持まゐらせさせたまふ。　〈総角　五、三二八〉

23は大君の臨終の場面であり、薫が大君の近くにいるため、視野のなかにいない阿闍梨に直接声をかけることができず、人を介在して呼び入れると考えられる。

「召す」と「呼ぶ」は、複合動詞を含め、人が介在する場合

もあり、介在しない場合もある。使役の助動詞を使う場合、必ず介在することから、「召し―」は「呼び―」と対応し、「召し―（さ）す」は「呼び―（さ）す」と対応する。

「呼ぶ」が前項になる複合動詞を、人が介在しているか（介在）、介在していないか（非介在）、また、人が介在している場合、使役の助動詞を用いているか（使役形）、用いていないか（非使役形）によって分けると、【表一】のようになる。また、「取る」が前項になる複合動詞をまとめると、【表二】のようになる。

【表一】「呼ぶ」の複合動詞の敬語体系

介在	使役形	1A　召し―（さ）す 1B　呼び―（さ）せたまふ 1C　呼び―（さ）す
	非使役形	2A　召し― 2B　呼び―たまふ 2C　呼び―
非介在		3A　召し― 3B　呼び―たまふ 3C　呼び―

【表二】「取る」の複合動詞の敬語体系

介在	使役形	1A 1B　取り―（さ）せたまふ 1C（取り―（さ）す）
	非使役形	2A　召し― 2B 2C
非介在		3A（取り―（さ）せたまふ） 3B　取り―たまふ 3C　取り―

Aは最高敬語に相当するもの、Bは敬意がAより低いもの、Cは無敬表現であるものである。

ヒトを呼ぶ場合、「召し―（さ）す」の例はあるが、モノを取り寄せる場合はない。[8]「取り―（さ）す」と対応するのは、やはり「召し―」しかない。

【表二】にあるように、人が介在する場合の「召し―」の通常語形になるのは「取り―（さ）す」の形である。すなわち、「召し寄す」の通常語形は、「取り寄せさす」が考えられる。た

だし、身分が低い人は他人を命令しモノを取り寄せることがしにくいと考えられ、実際に敬意がない1Cの例は源氏物語に存在しない。枕草子には24のような例が見られる。

24　ただの女房にて候ふ人の、御乳母になりたる。……、女房どもを呼び使ひ、局に物を言ひやり、文を取り次がせなどしてあるさま、言ひ尽くすべくもあらず。
〈枕草子　第二二九段、三六七〉

24は高貴な人の乳母になった女房が、更に身分が低い女房を使い、文を取り次がせる場面の描写である。乳母の一連の行為には敬語が使用されず、身分が高くないと分かる。源氏物語にはこのような場面がほとんどないため、「取り―（さ）す」の例が見られない。

また、非介在の3Aには、人が介在しないため「召し―」が対応せず、最高敬語に当たる例がない。しかし、最高敬語がないと考えるより、最高敬語に待遇される身分の人は、自らモノを取りにくいため、例がないと考えられる。単独の「取る」の場合は、25のような例が見られる。

25　帥宮と聞こえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器まゐりたまふ。……。（帝ハ）取らせたまひて、「……」とのたまはする御ありさまこよなくゆゑゆゑしくおはします。
〈少女　三、七三〉

25は帥宮の献上した杯を、帝が取る場面であり、「せたまふ」は最高敬語だと考えられる。複合動詞の場合の3Aにも、尊敬の助動詞を用いた「取り―（さ）せたまふ」が予想される。

従って、「召し寄す」の通常語形は「取り寄せさす」だと考えられる。

六、「召す」の通常語形

単独の「召す」の通常語形を考えると、ヒトを呼ぶ場合、【表三】のようになる。

【表三】「呼ぶ」の敬語体系

介在	使役形	1A　召さす 1B　呼ばせたまふ 1C　呼ばす
	非使役形	2A　召す 2B　呼びたまふ 2C　呼ぶ
非介在		3A　召す 3B　呼びたまふ 3C　呼ぶ

ヒトを呼ぶ場合、単独の「呼ぶ」の体系は複合動詞と同じ傾向を示す。ではモノを取り寄せる場合も同じように考えられるのだろうか。「召し―」の通常語形は「取り―（さ）す」だと考えると、「召す」の通常語形は「取る」に使役の助動詞「す」が付く「取らす」だと予想される。しかし、「取らす」は次の例のように、単なる「取る＋使役」ではない。

26　〔源氏→夕霧〕「その笛はここに見るべきゆゑある物なり。……。それを、故式部卿宮のいみじきものにしたまひけるを、……、かの宮の萩の宴せられける日、（柏木ニ）贈物にとらせたまへるなり。……」などのたまひて、　〈横笛　四、三六八〉

26は源氏が柏木の笛について述べる場面である。その笛は式部卿の宮が宴会のときに柏木に贈り物として与えるものである。この「取らす」は「柏木に取らせる」のではなく、「柏木に与える」の意味である。

辞書にも「受けとらせる。下の者に与える」（日国）と記載し、『古語大辞典』は語誌に「「取る」の未然形に使役の助動詞「す」の付いたものが、使役性を失って一語化したもの。……、物の授受の行われる方向に関して、古語では「とらす」と「えさす」とが対応していたということになる」と書いてある。

「取らす」は「召す」の通常語形ではない。他に何があるかを確認するため、同じものを取り寄せる例は、どのような動詞と共起するかを調査する。例えば「御琴」などの楽器を取り寄せる場合に注目すると、「召す」を用いた例と、「取り寄す」を用いた例が見られる。

27　楽所遠くておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿宮琵琶、内大臣和琴、箏の御琴院の御前に参り

て、琴は例の太政大臣賜りたまふ。〈少女　三、七三〉

28〔僧→尼君〕「（入道ハ）年ごろ、行ひの隙々に寄り臥しながら掻き鳴らしたまひし琴の御琴、琵琶取り寄せたまひて、……」など、〈若菜上　四、一一七〉

27は冷泉帝が朱雀院に行幸する場面であり、楽所が遠くて音楽が聞こえないため、楽器を近くまで取ってきてもらう。28は僧が尼君に入道の生活について述べる場面であり、入道は普段琵琶などを取り寄せて演奏すると述べる。従って、「召す」の通常語形は、一節で候補から外した「取り寄す」だと考えてよさそうである。

すなわち、モノを取り寄せる場合は【表四】のようになる。1Bと1Cにあるはずの形が使えないため、2Bと2Cに「取り寄す」が代わりに用いられる。しかし、それはあくまでも1Bと1Cの代用だと考えられる。

【表四】「取る」の敬語体系

介在	使役形	1A
		1B　~~取らせたまふ~~
		1C　~~取らす~~
	非使役形	2A　召す
		2B　【取り寄せたまふ】
		2C　【取り寄す】
非介在		3A　取らせたまふ
		3B　取りたまふ
		3C　取る

七、おわりに

本稿では、「召し寄す」の通常語形が何かについて、「呼ぶ」「招く」「取る」「召す」の複合動詞を調査することにより、以下の結論を得た。

1、ヒトを呼び寄せる場合の「召し寄す」の通常語形は「呼び寄す」である。

2、モノを取り寄せる場合の「召し寄す」の通常語形は「取り寄せさす」である。(9)

3、「召す」単独の場合の通常語形について、ヒトを呼ぶ場合は「呼ぶ」、モノを取り寄せる場合は「取り寄す」である。

4、モノを取り寄せる場合、「召す」の通常語形は「取らす」が期待されるが、「取らす」は「取る＋使役」の意味ではなく、「与える」の意味であるため、その領域は「取り寄す」が担っていた。

注

（1）本稿は、主体敬語の形から敬意を除く形を「通常語形」と呼ぶ。

（2）各辞書の通常語形の記述は以下の通り。「呼ぶ」「招く」：旺文社『古語辞典』第十版（二〇〇八）、旺文社『全訳学習古語辞典』（二〇〇六）。「呼ぶ」「呼び寄す」：東京書籍『最新全訳古語辞典』（二〇一〇）。「呼ぶ」：大修館書店『古語林』（二〇一〇）。「呼び寄す」：三省堂『全訳読解古語辞典』第四版（二〇一四）、ベネッセ『ベネッセ古語辞典』（二〇〇三）。「取る」：大修館書店『古語林』（二〇一〇）。「取り寄す」：旺文社『古語辞典』第十版（二〇〇八）、旺文社『全訳学習古語辞典』（二〇〇六）、三省堂『全訳読解古語辞典』第四版（二〇一四）、ベネッセ『ベネッセ古語辞典』（二〇〇三）、東京書籍『最新全訳古語辞典』（二〇一〇）。また、通常語形を明記せず、「呼び寄せる」「取り寄せる」「お呼び寄せになる」「お取り寄せになる」のように訳だけあるのは：小学館『日本国語大辞典』第二版（二〇〇二）、小学館『古語大辞典』第一版（一九八三）、小学館『全文全訳古語辞典』（二〇〇八）、岩波『古語辞典』補訂版（二〇一一）、三省堂『新明解古語辞典』第三版（二〇〇四）、三省堂『詳説古語辞典』（二〇〇八）、新潮社『新潮国語辞典』第二版（一九九五）。

（3）古代の複合動詞の存否を論じる先行研究は多いが、本稿はひとまず形の上で「動詞連用形＋動詞」になるものを複合動詞と呼ぶ。

（4）検索条件は、召す：「語彙素読み：メス、活用形：連用形」＋「品詞：動詞」。「呼ぶ」「招く」「取る」：「語彙素読み：ヨブ／マネク／トル、活用形：連用形」＋「品詞：動詞、活用形：連用形」＋「語彙素読み：タマウ」。

（5）「招く」の源氏以外の使用状況について、コーパスの検索範囲（中古）には、古今和歌集二例、平中物語一例、蜻蛉日記二例、落窪物語一例、枕草子一例、堤中納言物語二例、更級日記一例、讃岐典侍日記四例、合わせて十四例あり、「招き寄す」の例がない。また、古今和歌集を除き、十二例中七例が和歌か、和歌の一部の引用であり、稲穂などの植物が動作主体になる例が多い。

（6）「招く」も「呼ぶ」「呼び寄せる」「招待する」の意味があるが、日国によると初出が平家物語であり、現行の古語辞典が「招く」を通常語形にするのは、その影響だと考えられる。本稿の調査範囲は源氏物語であるため、「招く」はまだ動きを伴う動作だと考えられる。

（7）源氏物語以外にも、コーパスの検索範囲（中古）には、この使い方が見当たらない。各辞書の引用例を確認したところ、平家物語の例をあげる辞書と、上代の例をあげる辞書がある。上代の例には、以下のような例がある。

たらちねの母が呼ぶ名を【母之召名乎】申さめど道行く人を誰と知りてか

〈萬葉集　十一、三一〇二〉

百済人、此の嶋を呼びて主嶋と曰ふ。【百済人呼此嶋曰主嶋也】
〈日本古典文学大系『日本書紀　上』四七一〉

ただし、三一〇二番歌は「母が呼んでいる、その名を」とも解釈できそうであるうえに、表記が「召」であり、「呼ぶ」の確例としてあげられるかどうかが疑わしい。また、日本書紀の例は漢文であり、和文の例として使いにくい。

（8）モノヲ「召さす」の例は枕草子に一例だけあるが、異文があり、確例ではない。また、通常語形を「食べる」とも考えられる。

廊に殿上人いとおほかり。殿の御前に宮司召して、「くだ物、さかなど召させよ。人々酔はせ」など仰せらるる。
〈枕草子、第一〇〇段、二〇六〉

（9）また、本稿は具体的なモノを取る場合の複合動詞だけ取り扱った。具体的なモノではない場合（「取りなす」「取り分く」など）、「召し―」の例は見られず、尊敬の助動詞を用い、「取り―・取り―たまふ・取り―（さ）せたまふ」で敬意差を表す。

「……」と、言ふかひなげに（紫の上ハ）とりなしたまへば、恥づかしうさへおぼえたまひて、頬杖をつきたまひて寄り臥したまへれば、
〈若菜上　四、六四〉

宮（＝中宮）、〔↓源氏〕「いかなるべきこととも思ひたまへわきはべらざりつるを、かうことことしうとりなさせたまふになむ、なかなか心おかれぬべく」とのたまひ消つほどの御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、
〈梅枝　三、四一三〉

テキスト、索引

国立国語研究所（二〇一八）『日本語歴史コーパス』バージョン2018.03
https://chunagon.ninjal.ac.jp/

阿部秋生ほか校注・訳（一九九四）『新編日本古典文学全集　源氏物語』小学館

松尾聰、永井和子校注・訳（一九九七）『新編日本古典文学全集　枕草子』小学館

市古貞次校注・訳（一九九四）『新編日本古典文学全集　平家物語』小学館

参考文献

穐田定樹（一九七六）『中古中世の敬語の研究』清文堂

阿部裕（二〇一三）「古代日本語における動詞連接「トリ―」の様相」影山太郎編『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』ひつじ書房

北原保雄ほか編（二〇〇〇）『日本国語大辞典　第二版』小学館

中田祝夫、和田利政、北原保雄編（一九八三）『古語大辞典』小学館

付記

本稿は平成三十年度國學院大學国語研究会前期大会で発表した内容を加筆・修正したものです。発表に際して、貴重なご指摘・ご教示を賜わった先生方・参加者の方々にお礼申し上げます。